

# 久高島の島尻ミヤークニの歌語り

畠山 篤

野遊び<sup>モイアシ</sup>とは、若い男女が夜更けに浜や村外れの野原<sup>モト</sup>に出て歌舞音曲に興じ、男女交際を深めるものであった。三線<sup>サンシシ</sup>を弾く若者がどこにでもたいていおり、これに合わせて人口に膾炙された歌謡や即興の歌謡を歌いあつていた。遊び相手はほぼ同じシマ（村落共同体）の者で、闇にまぎれてよそのシマの男がもぐりこむことはよほど勇氣のいることで、ほとんどたたき出されていたようである。というのも、野遊びを通じて婚姻の相手を決める風習があり、同一村落の娘はその若者のものだという考え方が強かったからであろう。

ある老神女の語り さて、久高島に野遊びがあつたであろうか。なかつたという人もいれば、あつたという人もいる。

久高島では野遊びがなかつたというのが一般的である。今は亡き掟神<sup>ウツチガミ</sup>（御前居<sup>ウメサキ</sup>）は、その神役を二十代から亡くなるまで務めあげた神女で、久高島の祭祀をリードしてきた伝承者であつた。彼女は久高島は神の島だから野遊びなどなかつたと言ひ、次のように語ってくれた。

島尻ミヤークニ 知念半島の男たちが、久高島で野遊びをしようとして、舟を漕いでやってきたことがあつた。私たち島の娘は、白浜にあ

がつた知念の男たちに会ひ、この島は神の島なので野遊びなどない、さつさと帰るようにと言つた。そこで男たちは三線を弾きながら、次のように島尻<sup>シマシリ</sup>ミヤークニ（本部ミヤークニとも<sup>モト</sup>）を歌つた。

島尻ミヤークニ（本部ミヤークニとも）

- (1) サビシサヤ クダカ ウミノ マンナカニヨウ  
アサユウ ナミカジノ オトロチチュル  
（寂しさや 久高 海の 真中にヨウ  
朝夕 波風の 音ぞする）
- (2) ハナリクジマ シラハマヤ メーニミティ  
ミルトウクル ネラン  
（離れ小島 白浜や 前に見て 見る所がない）
- (3) クダカアバグワー クバシチャ ウガミヨウ  
ウガマリティヤ シュシガリヨ ウヤラヌ  
（久高の乙女小は 蒲葵<sup>クハ</sup>の下で 拝みヨウ

拝まれてヤ 自由に遊ぶことがならぬ)

(4) ワチヌ サビサビトウ ヒシタクナミヤヨウ

カワティウミヂユグワー ナグリタチュサ

(私の 寂々と 干瀬をたたく波やヨウ

可愛い思ひ人小に 名残り心が立つさ)

こうしてなかなか帰ろうとしない男たちに娘たちは白砂を投げつけたりした。振られた男たちは、浜に倒れながら頭上に手を上げて砂をよけようとしたが、その格好がいかにもおかしかった。

**歌謡の解釈** この語りは久高島に野遊びがないことを説くためのものであるが、はたして額面どおりに受け取っていいものかどうか、考えてみたい。この語りを聞いて幾つか気付くことがある。

まず、歌謡の解釈を試してみたい。(1)は、太平洋の荒波に洗われる小島・久高島の寂しさを歌っている。これは知念半島から東海の孤島を遙かに展望している図である。(2)は、一読すると久高島には白浜以外に見るべき名所がないという悪口歌に解されやすいが、島の白浜を目指して他を見ることがなく一途に舟を進めているという意である。この白浜こそ野遊びの場で、村の西南に位置し、ここを目がけて若者たちはよそ目もふらないで恋の渡海をしているのである。この恋の道行きは恋の成就を念頭に置いたものであるが、(3)は島の娘たちが神女なので野遊びができないと歌う。久高島最大の聖地はクボー御嶽すなわち蒲葵<sup>ハナ</sup>を神木とした霊域であり、神女たちはこの神木の下で神を拝み、またみずからも島人から拝まれているのである。島の女たちは神に仕え、兄弟や家族そしてシマ共同体の繁栄を祈る神女なので、われわれ

俗なる男たちとは交際を許されない、というわけである。(3)が若者の立場からの歌であることは、「久高の乙女小」という呼称からもわかる。

(小は指小辞<sup>グワイ</sup>)。島の娘たちが自分たちをこうも愛情たつぷりに呼ぶわけがない。久高島が神の島なので野遊びがないという娘たちの理屈を青年たちが聞き、大いに落胆しながら(3)を歌ったのである。(4)は、久高島の恋人(思ひ人)に未練心を抱き、交際できないことの寂しさを訴えている。男心の寂しさは干瀬に打ち寄せる波の寂しさと重ねられているが、これは(1)の久高島の寂しさと響きあっている。ここには久高島での暮らしの寂しさも渡海してきた若者の寂しさも、野遊びで慰められるだろうという思いが込められている。野遊びを拒んでいる島の女人を「可愛い思ひ人小<sup>グワイ</sup>」と呼ぶところに、男の未練たつぷりな口説きがある。

以上、四つの歌詞は、知念半島の若者が久高の女人を恋慕する心情と行動が時間の順に起承転結よろしく配列されており、定型化するほどに完成されている。

**白浜の野遊び** 右の語りは老神女の青春時代の体験談の形をとっているが、これほどの歌謡が一回生起的な出会い(あるいは偶然的な出会い)の場から即興的に生まれたとはとても思えない。また、よその若者が小舟に乗って苦勞して渡海してきた夜、たまたま島の娘たちが白浜にいたというのも、あまりに手回しがよすぎて不自然である。他シマの若者たちと島の娘たちが示しあわせてしばしば野遊びをしていたので、このように整った歌詞が巧みに配列されるほどになったと考えるべきではないだろうか。島の娘たちが神女の島であることを理由

にして野遊びを拒んだというのは、単なるポーズにすぎないようである。砂をかけられて戸惑っている若者たちの格好がおかしかったといっているが、ここには若者たちの芝居がかったポーズ・媚態があり、島の娘たちの若者たちへの好意・関心が強うかがえる。(3)で歌うように島の娘たちが真に野遊びにストイックであれば、若者たちの危険な夜の渡海も数えるほどで終わつたであろう。「離れ小島」の「白浜」めがけて渡海してくる若者たちが寂しがつてみせ、「可愛い思ひ人、小に名残り心が立つ」という殺し文句にわれを催して応えた乙女がすくなくなかったであろう。右の四つの歌謡は、白浜の野遊びのオーブニングソングで、ここからこそ野遊びは佳境に入つたとみるべきであろう。

かなり前であるが、先島の波照間島を調査しており、久高島の野遊びに加わつたという年輩の男性に会うことができた。戦後間もなくのこと、知念半島に滞在し、縁あつて久高島に渡つて野遊びをしたという。もつと詳しく訊ねようとしたが、途中から奥さんが同席したので口ごもられてしまった。いささか不確かな情報ではあるが、久高島の野遊びを証言する者が一人はいる。知念半島に行けばしかるべき年輩の男性たちからもつと確かな証言が得られるであろう。

変則的な野遊び 語りを聞いて次に気付くことは、久高島の若者の影がないことである。普通どこのシマ社会でもよその男を恋のライバルとみて野遊びから排除するのは、その共同体の若者たちである。しかし、久高島の男性は海人で、数えて十五歳になると一人前の正人<sup>ソニン</sup>と認められて地<sup>ヂ</sup>(畑)をもらう。これは自由恋愛と結婚を認められたこと

でもあるが、同時に海人として出稼ぎに出ることをも意味していた。遊び盛りの若者たちが留守がちな久高島であるから、同じシマ社会の若い男女で構成される通常の野遊びは久高島では成立しえない。島に若者があらかたいないことを見越してよそから若者が野遊びにくるといふのは、とても変則的なことである。

歌わない島の女 右の語りに出てくる代表的な歌謡のなかに、島の女人の歌がないことにも気付く。これは久高島の野遊びが変則的なことと関連するであろう。

島の妙齢の女性がすべて神女であるわけではない。高級神女には神女に就任する年齢の基準はないが、一般神女の場合は三十歳から四十一歳の女性が十二年に一度催されるイザイホーで神女になっている。この年齢では既に結婚し、母ともなっているのが普通である。したがって、妙齢の女人が(3)で歌うように神女であることを理由にして野遊びを拒むのは、正確には根拠が薄弱である。

島の乙女たちはやがて神女になることを予定されているが、一般神女になる資格として、(a)島に生まれ育ち、(b)島の男と結婚し、(c)島に住んでいることが求められている。島の一人前の男は出稼ぎ状況にあり、島は女たちが守つていた。よその男たちと野遊びを通じて結ばれ、結婚にまで至れば、島の神女になる資格を失い、島では生きにくくなる。島の娘たちはおなり神として海にある兄弟を守護し、シマ社会の繁栄を願う神女になることを期待されている。やがて夫になるであろう島の若者が旅にある時、よその若者たちと白浜で野遊びをするのは、いささか気の引けることであつたろう。島人もよその若者が自分たち

の島の乙女を目当てに遊びに来ることを喜ばなかったであろう。(3)の野遊びを拒む根拠の実態は、シマ共同体を守る神女に予定されているということにある。

もとより白浜での野遊びが禁じられていたわけではなからう。島の男たちも旅先で現地妻を求め、子を設けて島の本妻に育てさせたりすることが少なくなかったという。島の若い男女もこのような実態を見ている。シマ社会から逸脱しない程度なら白浜で発展家を中心に野遊びをしても大目に見られていたと思われる。

しかし、結婚に至るかもしれないという人生をかけるような野遊びでなければ、遊び歌の愛の讃歌にも今一つ面白味・真剣味が欠け、愛唱歌になるほどの歌にはなりえないであろう。

この点、知念半島の若者は神の島の神女への禁じられた恋を幻想し、これを叶えようとして危険な渡海もしているので、歌謡にはそれなりの情熱がこもり、人の心をうつものになったろう。その結晶が例の四首であった。

こうしてみると、白浜の野遊びはよその若者の情熱のわりには島の乙女は腰が引けており、互いの思惑にかなりの落差があったように推測される。

神の力学 このように、変則的ながら野遊びがあったのに、なぜ老神女は野遊びがないと説き、それを証すために白浜での遊び歌を引き合いに出したのであろうか。

これには島の女の一生が大きく関わっているようである。

久高島の結婚式(ニービチ)は、逃走婚で知られている。婚礼の夜、

花嫁は勝手口から脱けだして友人の家や男子禁制の御嶽に寝泊まりして新郎を避けるという風習で、早く夫に探しあてられると婚礼以前からふしだらな関係にあったと邪推されたという。この逃走婚の由来も、やがて神に仕える女性の立場から俗なる男との婚姻を拒否する姿勢を一応とらなければならなかったと説かれることが多いが、ここでもシマ共同体の論理が優先している。

しかし、新妻に触れられないまままた長いあいだ海に出ざるをえないことは気の毒なことで、青年男女は逃走期間を五日間とかに取り決めたという。私的な生活の論理もそれなりに尊重されていたのである。

もう一例を上げてみよう。イザイホーには全神女に課された貞操試験という側面がないわけでもない。不貞を働いた神女は、神域と俗界をつなぐ「七つ橋」を渡る時に血を吐いて倒れると言われている。しかし、現実には娘時代に艶聞をもつ高級神女がいなくてもなく、そのことを島人が厳しく批判している風でもない。公的な神人としての務めを果たしていれば、私的な生活はそれなりに大らかであつてもよかつたようである。

この点、久高島の野遊びも神と人の距離をどの程度とるかにある。

島の女性にとって若い時は自由恋愛を謳歌したつもりでも、結局は神女としての道を歩み、それを務めあげるることによつて完成した人格を獲得している。結局、野遊びは青春の淡い思い出にすぎず、最後には神の力学で秩序を語ろうとする。結婚も自由恋愛も野遊びも日常レベルのことであるが、若い時に遊んだ神女も老齢になると俗的な場にす

ら神の論理を持ち出すのである。

そして、野遊びを拒む論理を島尻ミヤーク二の(3)がよく示し、(4)が振られ男の心情を歌っていて神女の貞操が守られているように解釈できるので、老神女は神の島というたてまえをこの表面的な解釈によって説明しようとしたのであろう。

**歌語りの形成** 老神女のねらいはさておいて、彼女の語りは期せずして島尻ミヤーク二の歌語りになっている。久高島の野遊びがつむぎ出した島尻ミヤーク二の(1)と(4)が、逆に久高島に野遊びがなかったという語りを生み出しているところに、文学の形成される過程での逆説的な面白さがある。

これがもう一步進んで、四首の作者が特定の名のあるよそジマの男とし、恋の相手を久高島の名のある高級神女とすれば、神に仕える女ゆえに悲恋に終わったという、高度に文学的な歌語りになる可能性をも秘めている。野遊びという群としての大らかな男女の出会いを捨象し、一對の男女の純粹な恋物語に仕立て上げることもできるのである。老神女の語りは、「歌語り」が形成されていく現場の一つをのぞかせてくれた、という思いを深くする。